

日本の文化地図

国家が積極的に経済に介入する国家独占資本主義の段階に入っている今日、従来の科学主義的のほロシア・マルクス主義では

で、簡単にいうと、人間は自分が作り出したモノ、たとえば、宗教とか貨幣によって逆に規制

前衛の森

④ 取り残された毛沢東

ここで、もう一度マルクスの原点にもどって、現代に適用する理論を組み立て直そう、という動きがさかんになっていることは当然であろう。

その動きの中で、いま日本で有力なのは、疎外論と物象化論ということになっている。疎外論というのは、マルクスの初期の著作である『経済学Ⅱ』哲学手稿の中で述べている考えかた

る)などは、その代表的な存在であるようだ。

物象化論は、『ドイツ・イデオロギー』からはじまったマルクスの後期の考えで、人間と人間との社会的関係が、あたかも物と物の関係のようにあらわ

れている、という見方を示した論である。この物象化論は、ルーサーやフランクフルト学派に

されており、人間はこうした疎外の状態から自己を回復しなければならぬ、という一種の人間主義なのである。現代の疎外論者は、初期マルクスのこの考

えかたを基にしている。むしろこの背景には、スターリン主義の非人間的なプロレタリア独裁に対する批判があるわけだが、駒場で社会思想史の教授をして

いる城塚登(しろうつか)のほ

「関係」という考えかたをして

いることをとらえ、この「関係」中心の論理によって、マルクス主義に新しい展望を与えるばかりでなく、ゆきつまった近代哲学の二元論も克服できる、ということになる。

つまり、広松は、マルクスの中から新しい哲学の範型を発掘しようとしているわけである。広松にいわせると、疎外論は、

よって、批判にとりあげられているが、それを積極的に肯定論として展開しているのが、哲学の助教授 広松彦(ひろまつ)・わたる)である。

広松の考えは『マルクス主義の地平』(勁草書房刊)『唯物史観の原像』(三一新書)などに詳しい。それを一言で説明すると、疎外論の中でマルクスが

の新思想の鼓吹者は、またたく間に遺跡とならざるを得ない。

ロシア現代史の教授、菊地昌典(きくち・まさのり)もその犠牲者といえるだろう。菊地

革命として弾圧する実情に、つよい批判をもち、日本で最初の本格的なスターリン批判研究を行つたことになる。そうした菊地が、社会主義社会内での階級闘争を繰り返すこ

にどうめたことは、まだ記憶に新しい。

これに対しては、菊地の獣医という経歴に由来するナロード二主義(ロシアの農本人民主義)が、毛沢東の土着主義に共

感するあまり、スターリン主義的な側面を捨象してしまつた

二 章 藤 山 一 へ



主体を問題にしている点で近代哲学の範型から抜け出していないことになるし、城塚からみると、広松の物象化論には実践的な立場がないということになる

とによって、一党独裁の矛盾を解決しようという、毛沢東主義に共鳴するようになるのは理の当然であろう。文化大革命がはじまると、菊地はこれを人間の

むなおしはうくは、毛沢東の遺体をかかえていかなければならぬだろう。

は宇都宮農事と東大農学部で獣医学を専攻した後、ロシアの農地改革に興味をもつてソビエト政治史を研究するようになった変わり種である。しかし、スターリン時代のソビエト社会主義

政権が、人民の批判をすべて反

「前衛の森」の項終わり。次回には6月に掲載します。

(編集委員・百目鬼恭三郎)